2 Ga-10

乳幼児をもつ母親の労働と生活　ーイギリスの事例調査から

松村真木子　（お茶大・院）

目的　イギリスの女性は、子供をもつにあたり、労働継続か否かをどのように選択するのであろうか。本研究は、女性の労働観、経済力、家事分担、育児の支援策を軸に、女性が働くことと乳幼児を育てることとの関係を検討する。

日本には育児休業制度があり、不充分ながらも公的保育所が働く女性に開かれている。しかし、少子化が進み、年齢別労働力率は依然としてM字型を示している。一方、イギリスは出産休暇を享受できる層が拡大したとはいえ、育児休業制度が未だ制定されていない。にもかかわらず、1980 年代半ばからM字型の底があがり、90 年代にほぼ台形型へ移行した。

イギリス社会は、日本と比べて女性が労働しやすい状況が形成されているとは言い難いが、出産後乳幼児を育てながら労働市場へ参入する女性が増加している。そのため、イギリスの母親の労働と生活を検討することで、日本社会の特殊性を明らかにする。

方法　1998 年 7 月から 9 月にかけて、ロンドン北部において、乳幼児をもつ母親を対象に面接調査および質問紙調査を実施した。

結果　ロンドン北部の乳幼児をもつ女性は、生活を維持するために働くことが当たり前であると考えていたが、出産後も労働を継続するか、一時中断するかの選択には、自分の収入と利用可能な保育の支援策との関係が重要な要因となっていた。3 歳児神話を心に抱いている人はいなかった。女性が働く以上、家事分担は両性で平等に分担すべきであると考えている人がほとんどであったが、実状は、女性が多くを担っていた。すなわち、ロンドン北部で生活している乳幼児をもつ母親は、経済的責任も家事・育児の責任も担っていた。